



永元（一六二四）年のこと。この  
辺り一帯の埋立地の造成が進む一  
方、元和六（一六二〇）年には箱  
崎地区の南側に新しい水路が開  
削・整備され、日本橋川が亀島川  
の流路から、現在の流路に付け替  
えられました。

寛永三（一六二六）年に隅田川  
河口部に石川島が築島され、船手  
頭・石川八郎左衛門政次が拝領。同  
十二（一六三五）年八月には八丁  
堀北側に山王御旅所や薬師堂が建  
立され、一帯の市街地化が進行し  
ています。

◇九本の船入堀が開削

楓川が運河として整備された慶



明治九年 東京全図

長十七年に、「八町舟入」（八町堀＝  
桜川）も造られ、八丁堀地区や鉄砲  
洲一帯の埋立てが進行します。

同時期に日本橋川と京橋川との  
間に、楓川から外濠へ連絡する「九  
本」の船入堀が開削されました。  
江戸湊に海上輸送された江戸城築  
城用の石材等を揚陸するための水  
路です。鈴木理生氏は「このうち  
の何本かは道三堀と平行する形で  
日比谷入江に通じていたと思われ  
る」と述べています。

『寛永江戸図』に、通り町筋現・  
中央通り）の手前と通りを越えて  
外濠までつづく大・小九本の船入  
堀が描かれています。材木町一丁  
目と二丁目の間、二丁目と三丁目  
の間と材木町の町境ごとに入堀が

掘られ、そのなかで最大の入堀が  
五丁目と六丁目の間に掘られた水  
路＝紅葉川（※）でした。

※紅葉川（現・八重洲通り）  
江戸前島東岸と八丁堀の間の埋  
め残された水路は、楓川と名付  
けています。楓が紅葉すると「も  
みじ」、逆に「もみじ」は楓の代  
名詞でもあります。楓川と紅葉  
川の二つの水路は、一体の関係  
にあったことを物語る洒落た命  
名だったのです。

そして紅葉川の他に水路が二  
本、直接外濠に連絡していました。  
延宝七（一六七九）年刊の『江戸方  
角安見図鑑』に、北から三本目「大  
工町の広こうじ」、五本目「中橋の  
広小路」、七本目には「長崎町の広

こうち」が描かれています。この  
「広小路」の原形は水路でした。  
これらの水路は江戸城の完成と  
ともに、紅葉川だけを残して元禄

三（一六九〇）年までに埋め立て  
られ、音羽町・小松町・福島町・  
正木町・松川町・常盤町が起立。  
最後まで残っていた紅葉川の東側  
水路も、弘化二（一八四五）年三  
月には埋め立てられて新肴場請  
負地（町入地）となり、中橋と紅  
葉川という地名だけを残して姿を  
消しました。

『江戸方角安見図鑑』には楓川西  
側の本材木町七丁目と同八丁目沿  
いの河岸地には「石屋」、東側の向  
井将監邸から小笠原備後邸沿いの  
河岸地には「御舟くら」「御ふなく

ら」とあり、両岸が物揚場として利用されていたことが分かります。

◇楓川周辺には材木関連の町が集まった

楓川と外濠川とのあいだには、材木に関係する町名（職人町）が多かったのが大きな特徴です。中橋小路の北側に上横町と下横町、東側には北横町、南横町と富

横町。「マキ」は真木⇨柁目とおった、もつとも良質の木材という意味。大鋸町の「大鋸」は柁を製材する縦引き用鋸のこと、大鋸で引いた木材の断面が柁目になります。檜物町の「檜物」とは、檜の真木を柁目に沿って「へい」（へぐ⇨剥ぐ、薄く剥がす、むくという意味）で「まげもの」にしたもののことで、祭器や食器などがそのひとつ。

正木町も柁の町。樽正町の「樽」も真木を「へい」だ薄板のことで、建築材料として使用されました。桶町の「桶」の場合は柁目とおったサワラの真木が主流で、檜物よりもっと厚く「へい」だもので

す。酒樽は杉を使いましたが、桶町では棺桶も造っていたといえます。建設業の中心だった元大工町と南大工町、製品に漆をかける職人町の塗師町や南鞘町、箔屋町も並んでいました。

◇明治・大正期の楓川

『東京府志料』（明治七年編纂、以下『府志料』）に、海運橋川筋として「日本橋川筋より京橋川筋に至る横堀なり。西岸は錦町・本材木町一・二丁目、本材木町三丁目なり。東岸は坂本町・三代町・松屋町一・二丁目、高代町なり。延長一四町四四間（約一六〇六m）・幅凡一八間（約三三三m）、小舟を通す」とあります。舟筏「押送船二

九艘、伝馬船六艘、伝馬造茶船一四、茶船一二艘、似土船五艘、日除船八艘、水船一艘、漁船二艘」の合計七七艘とあり、楓川は舟運が盛んだったことが分かります。

楓川は、明治十六（一八八三）年十月五日、東京府の府達で「日本橋区元四日市町より海運橋・新場橋・京橋区久安橋・松幡橋を経て弾正橋に至る」水路が、俗称か

ら正式名称になりました。

大正十（一九二一）年三月の河川航通調査で、楓川は「日本橋区本材木河岸より京橋区柳町まで、延長六六七間（約一二二四m）、幅員最広二〇・一間（約三六・六m）、幅員最狭一・四間（約二〇・一m）、平均値一四・〇六間（約二五・六m）」「日本橋川と京橋川との間の連絡路で海にも近く、物資の集散に適していた。材木町の起りもこの関係によると思われる」とあり、当時も「湊」としての役割を十分に果たしていることが伺えます。

◇震災復興事業と楓川

大正十二（一九二三）年に起きた関東大震災と、その後の復興事業の「運河・新設・埋立て」についての概略は『郷土室だより』第一五六号を参照して下さい。

震災復興事業で実施された運河の改修の結果、楓川は「同時航行船数二（以下略）」「日本橋区本材木河岸地先日本橋川より京橋区本材木町三丁目地先桜川に至る。延長一二二〇m、幅員三三三m、深度

一・八m」となりました。

また楓川と築地川とを結ぶために新たに開削された築地川楓川連絡運河は、京橋区金六町地先桜川より同区木挽町一丁目地先築地川に至る。延長二九〇m、幅員三三三m、深度一・八m」の水路です。この水路の開削は、震災後に建設された築地の中央市場や汐留駅等との物流を考慮したもので、日本橋方面との物資の輸送⇨舟運の利便性が大きく高まりました。

※楓川など十一河川の改修（幅員の拡幅や川底の浚渫）によって生じた大量の揚土は、江東方面の地盤の低い地区の埋立て（幹線道路・補助線街路・区画整理街路・公園などの盛土）や浅草区・麹町区内の河川・濠の埋立てなどに用いられています。

◇水路が高速道路に

昭和三二（一九五七）年三月、道路整備特別措置法が施行されて日本道路公団が発足。同三四年六月には首都高速道路公団も創設されて、昭和三九年のオリンピック開催に合わせた高速道路の建設が

一気に進められます。

『郷土室たより』第157号で説明した通り、楓川と築地川は昭和三五（一九六〇）年五月に埋立免許があり、楓川と築地川の一部が高速道路に転用されました。工事は、干拓されて川底に道路が建設される掘削方式（日本橋川は水面の上を覆う高架式）を採用。

現在ある「橋」は、兜橋、海運橋、千代田橋、新場橋、久安橋、宝橋、松幡橋、弾正橋の八つ。これらの橋をそのままにして楓川を埋め立てて、その上空（下）に高速道路が建設されました。高速道路建設は、既存の橋を撤去する時間も惜しみ、突貫工事として行われたでしょう。

そして同三七年十二月、首都高速一号線の汐留〜日本橋本町間が供用を開始しました。同三八年六月には、江戸橋インター近くの高速道路下（四階地下駐車場）に、一千台収容の兜町駐車場も完成しています。

◇楓川に架かる橋

つぎに、楓川に架かる橋を北側

から、簡単に見てみます。○は『府志料』、●は『新修日本橋区史』『中央区史』などを参照しました。

●兜橋 明治十八（一八八五）年三月の創架で、江戸橋一丁目と兜町一丁目の間に架かります。橋名の由来は、町名と同様に兜神社境内にある兜塚によりま

す。 関東大震災（以下、『震災』）復興事業で架替えとなり、橋長三二・四m・幅員一一m、大正十五年二月に竣工しました。橋は楓川の埋立て・高速道路の建設で撤去されました。

●千代田橋 明治四三（一九一〇）年三月に市区改正事業で創架され、本材木町一丁目と坂本町の間に架かります。長さは一一間（約二〇m）、幅一〇・三間（約一九m）。

その後、震災復興事業の永代通りの拡幅に伴い架替えとなり、橋長三二・三m・幅員三三m、大正十五（一九二五）年三月に竣工しました。橋は楓川の埋立て・高速道路の建設で橋台が半分ほど残り、石造の親柱などは竣工当時の姿で残されています。

○海運橋（海賊橋） 本材町一丁目より兜町に架かります。長さ一三間（約二三・七m）・幅二間五尺（約五・一m）。昔、この場所に海賊奉行向井将監の屋敷があったことから海賊橋と呼ばれていました。

※『寛永江戸図』に「たか橋」とあることから、創架は寛永期かそれ以前と考えられています。『御府内沿革圖書』には「海賊橋」と見え、『江戸砂子』には「海賊橋、また将監橋、また石橋とも云う（略）。もとは石橋なりしとぞ」とあり、橋名は明治元（一八六八）年十月に海運橋に改称。橋の東には、幕府の船手頭（海軍長官）の向井将監の屋敷を始め水軍関係の役職者の屋敷が立ち並んでいたことは、先に述べた通りです。

○新場橋 本材木町二丁目より坂本町へ架かります。長さ一三間二尺（約二四m）・幅二間一尺（約四m）、橋名はこのあたりを俚俗新場と呼ばれたことにより、延宝二（一六七四）年に魚市場ができ、本小田原町の魚市場より後に起立したことから新場と呼ばれました。

※『新修日本橋区史』には「創架の年代は明らかにし得ないが、『寛文江戸図』には無名の一橋を記す故、万治（一六五八〜一六六一年）・寛文（一六六一〜一六七三年）の間に架せられたものと思われる」とあります。

明治十五（一八八二）年の『橋梁一覽表』には、兜町より本材木町へ渡る。石橋造で長さ八間（約一四・五m）・幅六間（約一一m）、明治八（一八七五）年九月の架設とありま

す。 その後、震災復興事業の楓川改修に伴い架替えとなり、橋長三五・二m・幅員一一m、昭和二（一九二七）年六月に竣工しました。橋は楓川の埋立てと高速道路の建設で撤去され、現在、橋名が刻まれた親柱二基が残ります。

す。

その後、震災復興事業の楓川改修に伴い架替えとなり、橋長三五・二m・幅員一一m、昭和二（一九二七）年六月に竣工しました。橋は楓川の埋立てと高速道路の建設で撤去され、現在、橋名が刻まれた親柱二基が残ります。

○新場橋 本材木町二丁目より坂本町へ架かります。長さ一三間二尺（約二四m）・幅二間一尺（約四m）、橋名はこのあたりを俚俗新場と呼ばれたことにより、延宝二（一六七四）年に魚市場ができ、本小田原町の魚市場より後に起立したことから新場と呼ばれました。

※『新修日本橋区史』には「創架の年代は明らかにし得ないが、『寛文江戸図』には無名の一橋を記す故、万治（一六五八〜一六六一年）・寛文（一六六一〜一六七三年）の間に架せられたものと思われる」とあります。

明治十五（一八八二）年の『橋梁一覽表』には、兜町より本材木町へ渡る。石橋造で長さ八間（約一四・五m）・幅六間（約一一m）、明治八（一八七五）年九月の架設とありま

す。 その後、震災復興事業の楓川改修に伴い架替えとなり、橋長三五・二m・幅員一一m、昭和二（一九二七）年六月に竣工しました。橋は楓川の埋立てと高速道路の建設で撤去され、現在、橋名が刻まれた親柱二基が残ります。